

## 西側メディア全体が一つの連携プレー軍団

【訳者注】これを一つ前の「ウクライナ：いかに主流メディアが報道を捻じ曲げるか」と併せ読んでいただくと、さらに事情がよく理解できるであろう。我々の接する新聞・テレビ報道も、基本的に「西側メディア」報道なのだから、いかに「捻じ曲げられた」ニュースを我々が与えられているかに気づく。単なる誤報であるなら大した問題ではない。我々に与えられている捻じ曲げ報道は、基本的に、我々を犯罪に巻き込むためのものと考えなければならない。ここに（5頁）適切に表現されているように、その本質的性格は「ネオナチ、反ロシア、不法、ファシスチック、戦争犯罪、証明済みの暴力団的気風」である。ここに紹介されているビクトリア・ヌーランドの言葉も、傲慢を通り越して暴力団的というべきである。我々は大変な時代に、大変な選択を迫られて生きている。

*西側メディアの振舞の狂気じみた騒ぎは、いかにそれが根本的に、政治的アジェンダと思想コントロールによって、操作されているかを調べる事例研究になりうる。西側の大手企業メディアの編集者たちは、ワシントンとそのヨーロッパ同盟国の政治的な流し釣りの餌を追いかけている。——編集者による本文からの抜粋*

By Finian Cunningham

April 20, 2015

数十億ドル規模の西側のニュースメディア・ネットワークは、無批判的で、決して揺らぐことのない、反ロシア・アジェンダに満ち満ちている。このアジェンダは、向う見ずにも国際的緊張を煽り立て、さらなる紛争と地球的全面戦争をさえ煽っている。

この不名誉な者たちの名簿には、“輝くスター”的企業の、CNN、ニューヨーク・タイムズ、ワシントン・ポスト、BBC、フィナンシャル・タイムズ、ガーディアン、フランス 24、ドイチェ・ウェレ、その他多くのメディアが含まれる。それらは、それぞれの政府のニセ情報アジェンダに歩調を合わせて行進する、連携プレー軍団そのものである。

彼らは完全に一体となって、地球的なプロパガンダ省として機能している。

定評あるロシアのニュースメディアは、ロシアの侵略がウクライナ紛争の原因だと主張する、無批判的な西側の物語に溺れることはなかった。言い換えると、ロシアのニュース産業

は、正しいジャーナリズム・サービスを提供している。

ロシアのメディアは、ロシアの“クリミア編入”について盲目的に語りはしない。彼らは、西側に支援されたキエフ政権のネオナチ的性格を、膨大な証拠にもかかわらず認めない西側の、メディア路線に従うことを拒否している。そのために、西側が推理するところでは、ロシアのメディアは、クレムリンのプロパガンダの道具であり、モスクワはニセ情報を拡散するために“連携プレー軍団”を送り込んでいるのだ。なんという皮肉な話か！

<http://sputniknews.com/europe/20150418/1021066599.html>

“クレムリンのプロパガンダ”という西側の主張は、典型的に、何の証拠の裏付けもない、主張の上に重ねた主張であるにすぎない。その“証拠”になっているのは、単に、ロシアのメディアが、主流の西側の見方を路上販売しないということである。そこで、全体主義的な精神構造によって西側の結論は、ロシアのメディアはプロパガンダをやっているに“違いない”、ということになる。

先週行われた米議会の公聴会では、いかにロシアが「情報を武器化している」かを長々と説明し、ロシアが「情報戦争に勝ちつつある」と宣告した。いかなる証拠も示されることなく、挑発的な主張の上に挑発的な主張を重ねただけである。

逆説的に、プロパガンダとメディア連携軍という非難は、西側の企業メディアニュースの論調に当てはめれば、確実に裏付けられるだろう。

ここで言っているのは、隠れたメディア詐欺師、ブロガー、CIA や MI 6 から支払われるメディア荒しのサイバー軍団、などのことではない。ここで言っているのは、職業的メディア企業全体——数十億ドルのグローバル産業——のことである。

例はいくらでもある。例えば先週、ロシアのプーチン大統領が公的に姿を消したことに対する、文字通りすべての西側メディアの、集団的ヒステリーを見よ。あの狂気じみた臆説を振り返ると、驚きと不気味さを感じる。

<http://sputniknews.com/politics/20150314/1019501171.html>

プーチンは、一週間、公的に姿を消した後で通常の仕事に戻り、それ以来、大統領の仕事をつづけて、つまらぬ噂を払いのけた。同時に、西側メディアも、その時は欧米のニュースがプーチンをめぐって興奮の発作を起こしたにもかかわらず、それを忘れたかのようである。この気違いじみた興奮は鎮まった。しかしほんの数週間前、西側ニュースメディアは、プーチンがいないことについての、熱病的なうわさや憶測に一樣に釘づけになっていた。宮廷ク

ーデータ？ 死んだ？ 整形手術を受けていた？ それとも彼のパートナーがスイスで出産した？

西側メディアの振舞の、そんなことを根拠にした騒ぎだけでも、いかに彼らが政治的アジェンダと思想コントロールに、完全に操作されているかの事例研究になり得る。西側の大手企業メディアの編集者たちは、明らかに、ワシントンとそのヨーロッパ連盟の、政治的な流し釣りの餌を追いかけている。その趣旨は、プーチンを悪魔化しロシアを不安定化させよ、というものだ。それは微妙な形のコントロールで、一つには、怠惰な、群れに付き従う編集者本能に訴えるのかもしれない。しかし、それにもかかわらず、この振舞は、目にも鮮やかなコントロールだといってよい。しかもこれは、“自由に考える、独立した”企業と考えられているものに起こったことである。

あるいは先週のモスクワでの、ロシア野党党首のボリス・ネムツォフの暗殺と、その後、今週のウクライナの首都キエフにおける、多くの人々の暗殺を考えてみよう。ネムツォフがクレムリン近くで銃撃されたとき、再び西側メディアは、西側政府とともに狂気の騒ぎを演じた。徹底的な“取材”によって、銃撃はロシア政府によって、反対党の声を封じるためになされたらしい、ということになった。

[http://sputniknews.com/trend/Murder\\_of\\_Russian\\_Politician\\_Boris\\_Nemtsov/](http://sputniknews.com/trend/Murder_of_Russian_Politician_Boris_Nemtsov/)

米大統領バラク・オバマの「透明な刑事捜査」を求める声は、プーチンが「契約殺人を指令したのかもしれない」という臆面もない、公然とセンセーショナルな憶測をするニュース報道によって増幅された。

米務省の“クーデタ担当副長官”ビクトリア・ヌーランドは、議会に対し、「何千というロシア正規軍がウクライナを侵略した」ことを証言する一方で、厚かましくもロシアに対する内政干渉をして、「銃撃者とそれを指令した者を発見するために、国際基準に則った」ネムツォフ銃撃の刑事調査を「要求した」(demanded)。「指令した者」とは、プーチンの横面を張る、小ばかにした言い方である。

この大げさな反応を、今週キエフでの、3人の反対派人物の契約殺人への関心が比較的薄いことと、対照してみよう。

犠牲者の一人は、有名な新聞編集者 Oles Buzina、もう一人はウクライナ議会の元長老議員だった。犠牲者たちはすべて、はっきり物を言い、西側に支援された体制の有力な批判者だった。彼らの殺害は、昨年2月に、西側に援助されたネオ・ナチ扇動団と親衛隊式の部隊によって追い出された、ヤヌコヴィッチ政府につながる、野党の中の少なくとも4人が、疑わ

しい死を遂げた事件に続くものだった。

これらの連結した死は、批判者を排除するための政治的殺人の、統御されたキャンペーンを指し示している。

ところが、西側メディアの、キエフにおける政治的殺人に対する反応は、ボリス・ネムツォフの銃撃に比較すると、明らかに抑圧されている。“透明な調査”を求める高レベルの要求もなく、西側の支援を受けたペトロ・ポロシェンコ大統領や、キエフ政府の他のメンバーに対する、疑惑のほめかしもない。

実際、最近のキエフの殺人の比較的少ない取材の中で、西側のメディアは意地悪くこう推理している——犠牲者たちは彼らの運命に値する者たちか、さもなければ、殺人は、キエフ政府に汚名を着せ、この国を不安定化するために、ロシアの工作員によって実行されたものだ。事実を扱わないとはまさにこういうことである！

「フランス 24」紙の特派員 **Gulliver Cragg** は、パリのニュース番組司会者に、彼のキエフでの聞き込みによると、犠牲者 **Oles Bujina** は“論争好き”（つまりトラブル・メーカー）で、“ブジナをジャーナリストと呼ぶのさえ間違っている”のだと話していた。

「フランス 24」による放送は、ジャーナリズム、倫理、および国際法に対する侮辱である。要するにそれは、「ブジナはそれに値する」と言いたいのである。

ところで、「フランス 24」の **Gulliver Cragg** が、キエフ政権のために恥ずべき代弁者の役を演じたのは、これが初めてではない。昨年 5 月、オデッサの税関ビル虐殺事件で 40 人以上が殺された後、彼は、この殺人はキエフ政権に泥を塗るために、ロシアの工作員がやったことかもしれないという説に言及した。ここでもまた、キエフ政府が下手人であることを示唆する事実を、完全に無視していた。

この話から我々は、キエフの最近の暗殺事件についての、フィナンシャル・タイムズ紙の作り話へと導かれる。この報道は、キエフの内務省アドバイザー **Anton Geraschenko** が言ったという「これらの殺人は、キエフに恐怖とヒステリーの雰囲気をつくり出すために、ロシアの情報局が組織したものだ」という言葉を引用している。

政府役人の口から出た、刑事捜査の“国際的基準”を順守する声明とは、とうてい言えないものである。

もう一つ加えると、ロンドンに本拠をおくフィナンシャル・タイムズは、「これらの殺人はモスクワから承認を受けたものでもある」と言ったという、大統領ポロシェンコの言葉を、目立つように引用している。真っ赤な顔をしてポロシェンコは言っている——「これらの銃撃は我々の敵の手に委ねられたものだ。彼らは、ウクライナ内部の政治情勢を不安定化し、ウクライナ人民の政治的選択の信用を失わせることを狙っているのだ。」

「フランス 24」も「フィナンシャル・タイムズ」も、これらの殺人はキエフ政権の汚い仕事だと、もっと説得力をもって言えたはずの人々の引用はしていない。

我々がこの 2 つの新聞を取り上げたのは、キエフの政治的暗殺の話題だけでなく、ウクライナ紛争全体についての一般的な西側の反応の、例として選んだにすぎない。

西側メディアは、キエフの西側に支援された政権のもとでの現実の風土——ネオナチ、反ロシア、不法、ファシスチック、戦争犯罪、証明済みの暴力団的気風——を調査するのではなく、否定モード、隠ぺいモード、敵意をモスクワにぶつけるためのニセ情報モードに、ひたっている。

西側メディアは、虚栄の、自己称賛的な“独立した報道、思想と表現の自由、真理の怖れなき擁護者”であることを誇っているかもしれない。しかし実のところは、西側のいわゆるニュースメディア企業は、単に、一つの巨大な連携プレー軍団が、ワシントンとその西側連盟国の政治的アジェンダに歩調を合わせて、行進しているにすぎない。

ウクライナとロシアは、西側メディアの多くの全体的プロパガンダ機能の、一つの表れに過ぎない。その機能は数十年も前からそこにあった。ただ現在それは、ますます透明になりつつある。

西側の政治家たちは、西側の大衆が、ロシアの連携軍団、クレムリンのプロパガンダと考えているものに侵略されつつあることに、いらだっているかもしれない。しかし実のところは、西側の民衆はすでに、ある連携軍団——西側の企業“ニュースメディア”と呼ばれるもの——の圧政的な占領下にあるのである。